
ポケモンTHEクロニクル

月夜魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンTHEクロニクル

【NZコード】

N5940Y

【作者名】

月夜魅

【あらすじ】

突如現れた異形の存在、悪魔……。悪魔から世界を守るために、デッドバスターとなつたポケモン達が立ち向かう！！

† † † † † †

この世界には、二つの種族が存在する。

一つは、ポケットモンスター。彼等は、自らを魔獸と称したりする。地下都市アンダーワールドで暮らし、もうひとつ別の種族から身を守つている。

その種族が、悪魔と呼ばれる異形の存在。ポケモンを喰い、無限に成長し続ける魔物だ。

マザーコアと呼ばれる母体がいるらしいが、何処にいるかわからな
い。

この物語は、デッドバスターと呼ばれるポケモン達の記録。クローケル

セイコク

成國 一〇一七年

地下都市、アンダーワールド。悪魔から身を隠して暮らし、ありとあらゆるポケモン達が住む世界。

東西南北の地区があり、ポケモン達はパレットと呼ばれる家で生活をしている。破れた衣と棒で作ったテント、石を積み上げて作ったモノ……。種類は様々。

全部で四つの地区は、四のブースに区切られている。かつて、外界にあつた国と同じ数十七になるよ。統治者である王の元、平和が保たれている。そんなアンダーワールドには、秘密組織と言つべき存在が……。

西地区 第四ブース

「……。」

右腕に包帯を巻いた漆黒のポケモン……ダークライ。彼はここの中王で、闇の国とこの場所を納めていた。誰よりも純粹で優しい心を持ち、各国からも指示を得ている存在。

高台にいる彼が見つめる先には、十七人のポケモン。地面に座り、頭に機械ヘルメットを付けて眠っている。

彼等は「デッドスター」と呼ばれている、特別な存在。悪魔の血を取り込み、悪魔ポケモンと化した……悲劇の戦士。世界を悪魔から守る為、自らこの道を選んだ者達だ。

「イメージトレーニング終了了！全員ヘルメットを外せ！――」

ダークライの号令で、戦士達は一斉に目覚める。

「次は武器のメンテナンスだな……。呼び出された順番に、ラルク博士の研究所へ。」

「「はい！！」

「デッドバスターについて、少しお話しあいましょう。

デッドバスターになるには、悪魔の血を受け入れる……つまりは、適合者でなければならない。ただ思いが強いだけでは駄目なのだ。悪魔化すると、ポケモンの力と悪魔の力が合わさり更に強力な技を身につけることができる。そんなポケモン達が、デッドバスターとして活躍するのだ。

デッドバスターになると、体内に寄生兵器を宿すことになる。予め武器のオーダーを取るから、戦士達は安心して体を預けられる。その相手が……。

「じりっしゃ～アい 三ヶ月に一回のメンテナンスよ～ん 」

「相変わらず……ですね。ラルク博士。」

ランクルスのラルク博士。会話をしている戦士は、ゾロアーク。悪魔化している為、本来赤い部分が黒銀に染まっていた。鬚は、磨いた鉄のよつに美しく輝いている。

「ささ！ 座つて座つて

「はい。」

「えつとう……。カルマくんだね？ 武器はクリスタルの鎌。」

パソコンを片手に、ラルク博士はカルマと面談。武器の調子や、悪魔と戦っている最中に不具合がなかつたか、破損はしたか等々。メンテナンスに必要な情報を集めていく。

「あ、お兄さん元気？弟くんは？三人兄弟なんだよねえ」

「博士、脱線してゐる場合ですか？」

「おひとーついい。……。せひ、とくに異常は無いみたいだから…
バックアップだけにしてよつか。君はいつも無茶をするからね。
誰かさんみみたいに。」

付き添いで来ているダークライをチラ見し、ラルク博士は準備にかかる。当のダークライはと、苦笑いするしかなかつた。

「みんなが終わり次第、貴方もメンテナンスね？ガイア黒王。」

「わかっている。」

机にパソコンを置き、ラルク博士は後ろのメインコンピュータに向かう。ガチャガチャと何かを探し始めた。

「あつた。」

「……痛いんだよな。それ。」

「ガマンガマン！」

「コンセント……に似た頭が付いてるコードを引っ張つて来て、カルマの腕に突き刺した。その瞬間、カルマの体に激痛が走る。ほんの一瞬の出来事は過ぎ去り、息を切らしぐつたりと椅子にもたれる。

「い……てえ……。」

「あーやつぱり。ちょっとガタが来てるねえ。治しどくよ」

「え、あ……はい。」

「痛いからって駄目だよー？嘘ついたちやー！」

胸を押されてジタバタもがくカルマ。ダークライのガイアは、見て呆れていた。

本来なら「うは」ならないが、扱いが雑だとカルマのよひになる。死にはしない。

「他の子は痛がらないんだよ？無茶苦茶な使い方、してるんじゃないの？」

「博士、それルークにも言つてやつて下れ……イッタア！！」

「やれやれ。……はいおしまい一次はオズくんだね。」

「余はもう来ているのだ。」

一同振り向き、入り口の前に立つ声の主を見つめる。そのポケモンはデスカーン。デスカーンはカルマを見て、笑みを浮かべた。

「やあカルマ。ずいぶんと叫んでいたが、大丈夫か?」

「な……なんとかな。今、一人称とか喋り方……違つてなかつたか?」

「ん? 聞き間違いじゃないかな……。俺はいつも通りだぞ。」

「そりか……。じゃあ博士、また。」

「お大事に!」

プラグは抜かれ、カルマは研究所を後にする。

カルマが去つたのをいいことに、デスカーンのオズは口調を戻した。

ふう……。と一息つき、オズは一人と会話する。

「さて……。前から話したかった回想だがな。唯一の王適合者は、余とガイア殿だ。不適合者になつてしまつた王や民は……。」

「技も特性も失つてしまつた。だよね？」

ラルク博士の発言に、オズとガイアは頷く。

不適合者とは、悪魔化せず、技も特性も失つてしまつた者達のこと。悪魔の持つ治癒力はあるため、武器を手に外界で悪魔を研究している。スラムという集落で、自給自足の集団生活。集落にはリーダーが一人いて、階級が上のリーダーが全ての指揮を取る。もう一人のリーダーは、補助をする為にいるようなものだ。

ここから「テッドスター」の基地に向けて、悪魔の出現や研究結果が届けられるのだ。

「今までやたらめつたにしていたからな……。望んで来てくれた者達には、詫びねばならない。」

「今はティアルガとレシラムが協力してくれている……。不適合者を出せずに此処まで来たのは、余は、彼等のおかげだと思つてゐる。

」

「嗚呼。そうだな。にしてもお前、民に化けて活動をするとは考えたな……。私には真似できないぞ?」

「民のダークライはいないからな。デスカーンには民の者もある……。王だと隠すには打つてつけじゃ。」

強く鉄の扉を叩く音がし、一同は扉へ目を向ける。オズは慌てて椅子へ腰掛けた。というか……立つていて。扉を開けて現れたのは、ガイアの部下であるヨノワールだった。

「どうした? またアイツ等か?」

「は……はいッ! —ズルズキン四人組が、脱走しましたッ! —」

エディミィという町を走る、ズルズキンの四人。悪魔化しているのは、内三人だけ。メンバーを紹介しましょう。先頭にいる、黒いタンクトップにズボンの皮、悪魔の目をしたズルズキン。『ルーク』。最近は黒い手袋を履いている。後ろで彼の尻尾を持つて走つてるのは、不適合者なのにデッドスターをしている双子の弟。『エール』。白いパーカーがトレーディングだ。

傷付き失明した開かずの左目、胸にザラ紙を巻いた普通の色違い。『シスカ』。

完全に悪魔化しているズルズキン。『イヴィル』。その姿だが……ズルズキンの原型をとどめていない。鶏冠じゃなくて赤い鬚、肌は濃紺。五本指を折らないと地面に付いてしまう、長い腕。首と手首には白くふさふさの毛……。悪魔だから皮は着ていない。

以上。ズルズキン男子四人組の紹介でした。

「メンテナンスなんてしゃらくせえッ!! 野郎共一ツ!! 脱走だ走れ——!!」

感情のままに進むルークを見て、はいはいとシスカは笑う。

「エール疲れた。ルークうー。」

「よしきたツ……」

立ち止まり、ルークはお姫様抱っこでエールを運ぶ。

「チヨツと待テ。ド「ま」テ走ル氣だ?」

奇怪な声でイヴィルが喋る。彼の言葉は、今いる三人にしか理解できない。理由は、またいづれ。

「とつあえず逃げる……」

「……ヤレヤレ。」

「行くよ、イヴィル。」

走り去るルークを追うシスカとイヴィル。その頃ガイアは、高台からエディミィの町を見つめていた。

右手を町へ向け、目を瞑る。闇を見つめるガイアの目には、無数の白い光が映っていた。ガイアが見ているのは、ポケモン達の魂。これは、彼にしかない特集能力。手をかざしている範囲内の魂を見ることができ、悪魔とポケモンの識別も可能だ。なぜなら、悪魔の場合魂は赤いからだ。

「いたいた……。サクラ、頼む。エディミィ大橋の入り口付近だ。」

「はい。黒王様。」

女性のサーナイトは指示通りに超能力を使う。四人組を此方へ引つ張り込むのだ。
十分もしないで、四人組は元の場所へ。ルークは胡座をかけてふてくされている。

「畜生。面倒臭せえ……。」

「黙れルーク。つたく……これで何度もだ？」

「グルルル……。」

「三十五回目だつて。」

シスカが代弁。ガイアは呆れ果て、ため息すら出せなかつた。

「あとはお前等だけにした……。ルーク、行つてこい……！」

「あいあい……。……ん？」

ルークの皮を引っ張り、エールは表情で寂しいと訴えた。シスカが近寄り、一緒に待つてあげようか。と微笑む。

「グルルル……。」

「……わかつた。エール待つ。」

惜しむように手放し、ルークを見送るエール。ルークの姿が消えると、赤ん坊のようにグズり出す。大きな腕でエールを包み込み、

イヴィルは懸命に慰めた。

ルークが毎回脱走するのは、実はエールのため。エールは人見知りが激しく、かつ臆病で寂しがり。ルークがいないと、不安に押し潰されそうになるのだ。

「ルーク……。ルークう……。」

「大丈夫。シスカと自分ガイルかラ。一人ジヤナイヨ?」

研究所の中、ルークは双子の弟のことをずっと考えていた。ラルク博士の面談には正直に答えていた。

「うわー、直すの大変だなあ……。相変わらず、エールくんの為に無茶苦茶やつてるね。なんで、不適合者のエールくんをデッドバスターにしろなんて言ったの?」

「色々あんだよ。アイツは、俺がいなきやいけないんだ。離ればなれだつたら……エールは……。」

「……。よし、直すよ? 今回はかなりの激痛になるから、覚悟してね。」

「コンセントに似たプラグと、注射針が付いたコードを取り出してルークの腕に。それが終わると、ラルク博士はコンピュータに向かう。修正プログラムを起動させた。

「一時間はかかるからね？」

「了解……。…………うツ！－－アアアアアアツ！－－」

ゾロアークのカルマが受けたものより強い痛み。必死に耐えるルークだが、我慢できず悲鳴を上げていた。

この様子を見つめながら、ガイア魔王は過去の回想をしていた。それは、まだティッドバスターが生まれる前の……。ディアルガとレシラムに出会いまでの記憶。

To be Next

序章前編・始マリノ刻（後書き）

【次回予告】

ガイア魔王

「真実の神レシラム、時の神ディアルガ。
彼等が無事、下界に来ていなかつたら……我々は終わつていた。」

次回は、今の状況になつた理由を話そう。」

回想

千年以上も昔、悪魔は突然現れた。強いポケモンを本能的に探し当て、片つ端から食い荒らす。

惨劇は止むこと無く、悪魔を恐れたポケモン達は、地下都市を築き上げ地底で暮らし始める。以来、外へ出たことが無かつた。デッドバスターが生まれるまでは。

数年前

地下都市で暮らし始め、千年が経つ……。

悪魔に怯える暮らしを続いているポケモン達……。恐怖からのストレスに耐えきれずバタバタと死んでいった。これを聞き、世界各国の代表。ポケモンが中央広場に集い始める。緊急集会が行われた。

南地区代表：リザードン

北地区代表：エンペルト

西地区代表：ドレティア

東地区代表一名：ドサイドンとケンホロウ（）

悪魔と戦った経験者：ダークライとミコウジー

部下に見守られながら、代表達は悩み苦しんだ。どうすればいい…と。

「セルフィオ王、ミュウツーの貴方が勝てなかつたと父上から聞いています。誠でしようか?」

リザードンが、ミュウツーに恐る恐る聞いてみる。ミュウツーは目を瞑り、静かに頷いた。

「申し訳ない……。ダークライと手を組んでいても尚、勝気は無かつた。あれから千年か……。このままでは、悪魔は地下都市にくるであろうつな。」

「これを聞き、部下達が騒然とする。ドレディアは一人に向けて叫ぶ。

「一大勢力と恐れられた、最強の闇と言われしも一人が勝てなかつたのですか?!」

今度はダークライが贏つ。

「嗚呼。この通り痛手を負つてきたよ。」

ダークライの右腕には包帯。肘まで続く包帯を外すと、木製の義手が姿を現した。銀のネジで固定されていて、痛々しく見える。

身を震わせ、ドサイドンは「無理だ」と呟く。この言葉に怒り、リザードンが拳を作つてドサイドンに殴りかかる。

「テメヒーッーー！」

「待て、ガジエット。」

「ー……イブキ。」

リザードンを止めたエンペルトは、冷静にこう切り出す。

「神に頼る他ないな……。」

また、辺りが騒然とする。存在がわからないモノにすがる気か？
！と、ドサイドンは怒鳴った。

「こらだらつ？」

「神話になッ！…実在しない存在に追いすがるより、我々でなんとかするのが正しいはずだッ！…それともイブキ……。貴様、神を見たことがあるのか？」

全ての視線がエンペルトに向けられる。表情一つ変えず、「夢に見た」と一言。ドサイドンは何も言わなかつた。

この世界で、世界創造の神として語り継がれているポケモンは、二十以上存在する。一口に神といつても、民と共に世界を見守る……いわば管理人のようなものがほとんど。彼等は【神の代行】と呼ばれている。

実在がはつきりと確認されていない特別な存在……。それが、彼等がいう【神】だ。エンペルトは、その中の一人に会つたという。

「神話では確か、強き思いを抱く者にのみ姿を現すとあつたな。夢

と喧嘩形ではな……。信じられない。」

「フン……。これだからドサイドンは嫌いだ。頭が堅い。」

「なんだと?..!」

「喧しいぞ。」

ダークライに止められ、ドサイドンは静かになつた。足元を見て、不服な表情をしている。

「今は作戦会議中だ。喧嘩や関係の無い会話は控えるんだ。……で
? イブキ、その神は?」

「時を司りし者……ディアルガ。」

「……。それはまた、大層なお相手だな。話を戻すぞ? 議題は、
悪魔討伐の作戦。エンペルト、イブキの提案は、ディアルガに頼むと
……。だが、どうやってだ?」

「騙されたと思って、時の帳に行くところは？」

ヒンペルト、イブキはそう提案するが……。場所がわからない。皆はまた悩み苦しむ。そんな中、何処からか声が。

「これを使うのはどうかな？」

「？」

「何奴ツ……！」

「やうひ警戒するな、ミュウツーの王。余だ。デスカーンのオズだよ。

「

時計台へ視線が集まる。楽しげな表情で、デスカーンが鉄のタルを持つてこちらを見つめている。彼の頭の上に、ランクルスというポケモンがしがみついていた。

「降りて来たらどうだ？」

ダークライが言つ。ゆつくつといふに向かつて降つるトスカーノ、オズ。

場所を開けてやり、一同テスカーンの言い分を聞いてみることに。

「よいしょ。」

「トン

「久しいな。諸君。」

「挨拶はいい……。オズ、それはなんなんだ？」

半場呆れているダークライ。腕を組んでタルを見つめる。真剣な表情に変わり、オズはためらい無く回答。中には、悪魔の血液が入つていると告げた。ダークライとミュウツーを除いて、一同は大パニック。

「モツ……そそそそんな物騒なモン何に使つんだよ……」

「セウト……」

「詳しく聞かせてもらおうか?」

リザーディンドレイアの話しが押し退け、ミコウシーナが。ヤリと笑うその笑みは、悪役のよ。

「おお恐い。……さて。余が言いたいのは、彼が説明してくれるぞ。ランクルスのラルク博士だ。」

オズの頭から降り、タルの上に立つランクルス。場違いの明るい雰囲気の彼は、王達の前に関わらずほほため口。緊張もせずスラスラ会話をしていく。

「オズ陛下に悪魔の研究を頼まれましてね?殿と外界に出て、コチラを採取したのさ 悪魔はポケモンを食べて成長する生き物で、その強さは無限に上がり続ける。つまり、化物つてことだね。悪魔にもタイプがあつて、攻撃・防御・スピードの三つがある。ポケモンみたいに複数持つてたりつてのは無いけど、いっちに帰るの苦労

したよ？そんな化物に対抗するには……？逆に我々ポケモンも、悪魔の力を付けるしかない！－－ということで、策を考えました。」

「田には田を、歯には歯を……。どこだらう？余はもう試した。セルフイオ帝王、最大でバリアを張つてくれないか？余が成果を発表しよ。」

「何？最強のこの私を、越えているとでも？まあいいだらう……。」

嘲笑い、ミュウツーは言われた通りにした。王や部下達は後ろを避け、彼等の左右に着いた。

深呼吸し、オズは集中力を高める。構えて、影の手全てをミュウツーに向ける。余裕の表情をするミュウツーだが、オズは勝てると確信していた。

赤黒い炎を手に纏い、手を全て中央へ。ポケモン技では無い、炎の光線を発射した。

刹那、ミュウツーの顔色が変わった。背筋に冷たいモノが走り、完璧な防御姿勢を取つとするが。もう遅い。

「オオオオン－！」

「「ヴィヴィアーチュ王ッ！…！」

ミコウジーの部下達が走る。煙が晴れると、壁に叩きつけられ瀕死寸前のミコウジーが……。

「ぐ……うう……。」

「！」の通り、パワーは悪魔そのものだ。」

「なるほど……な。フフフ……。良い成果だ。オズ。」

「ズタボロの貴方を見るとは思わなかつたのだ。」

ニヤニヤ笑いながら、オズはオレンの実を投げ渡した。

収穫はそれだけでは無い。オズは一同に向けて言つ。「今度はなんだ？」とダークライ。腕を組んで氣だるそうな目をしている。

「時の帳が光っていた。」

「「ええ？！」」

「お前見つけたのか？！」

「かつかつつかつか！地上に残されてしまったポケモン達が、悪魔に食われる様を天界からしつかり見ていたみたいだぞ？神々は、やつと味方に着いたのだよ。……千年待った。千年もツー！余の叔父上が言つていた奇跡が、今ツー！起きたのだ！！」

「ん、ん。興奮してるとこひひ悪いが、悪魔化するにはどうすればいいんだ？」

咳払いの後で、ダークライはオズに聞いた。

「簡単だ。悪魔の血液を飲めばいい。ただしな、身体に馴染むまでかかるぞ？余は一ヶ月くらいだったかな？」

「無事に時の帳に辿り着くには、悪魔化するしか…！」

「だな…！」

「では、開けますね。」

ラルク博士は、バルブをひねつてタルの蓋を開ける。蓋はゆっくりと持ち上げられ、中から大量の鮮血が現れた。石のコップに鮮血を汲み、オズは王達に手渡す。意見一致したものの、王達は抵抗の表情を浮かべている。その中で一人、ためらわずに飲み干したポケモンが……。

「ガイア黒王、セルフィイオ帝王……。決意が早いお一人じゃな。」

「フン……。このセルフィイオが遅れを取るものか。悪魔からポケモン達を守る……。王として当然のことよ。」

「この言葉を聞き、王達は次々と鮮血を飲み干していく。噎せかえる他の王達をよそに、ガイアはセルフィイオを横目で見つめ言つた。

「元・恐怖政治をした独裁者が、何を言つかと思えばそれか。」

「なんだと？」

「言つたままの…………つ、うツ……」

胸を押さえ、ガイアは崩れ落ちた。ミユウツー、セルフィオに抱えられたガイアの体は、四十度を超える熱を出していた。熱と激痛に耐えるどころか、ガイアは気を失ってしまった。呼吸はしている。

「ガイア…………ガイアッ！！」

「セルフィオ帝王、大丈夫。しかし何故だ？ガイア殿だけが余と同じ症状を……。博士、調べてくれんかな？」

ガイアはオズの宮殿に運ばれ、完全に悪魔化するまでオズに見守られた。その間王達は、ラルク博士の研究所で血液検査を受けることに。すると、不適合だったと告げられる。

「なんだと？！」

「セルフィオ帝王、そう怒鳴らないでくださいな！えっとねえ……。

「どうやら、全員が必ず悪魔化する訳じゃないみたいなんです。お気を悪くさせようですが、技と特性が全て無くなっています。」

頼みの悪魔化は出来ず、王達は落胆。一人だけに任せることしかないのかと、ケンホロウは嘆く。

「私は諦めんぞ……！」

セルフィオは研究所を去り、扉へ向かう。ラルク博士に止められ、立ち止まった。

「セルフィオ帝王——いくらミュウツーの化学力でも、こればっかりは無理ですよ……！」

「ガイアは私に教えてくれたのだ……。本当の幸せを、本当の生き方をツ——！あいつだけに良い格好はさせないツ——！」

「……」
「言つて、セルフィオはいなくなつた。

「やれやれ。仲が良いのか悪いのか……。」

ケンホロウは苦笑いで扉を見つめる。

「ライバルってやつですね？……あの、これを利用すれば、悪魔を倒す戦士を作れるのではないでしょ？」

ドレイティアの提案。それは良い判断だと、ケンホロウは賛成。

「各地に、悪魔を倒そうと意気込んでいる集団がいるんだー！彼等に頼めば、私達の代わりに戦ってくれるはずだッ！」

「けど、適合者が出るのは奇跡でしかないぞ？オズ陛下とガイア黒王はたまたま当たつただけぞ。」

ラルク博士は乗り気じゃない様子。王達を止めはしなかつたが、結果はこの通り。

千、一千……。男女問わず、王の呼びかけで自ら現れたのはこれだけ。本当ならもつといはるはずなのだが……。

「…………どうだ？ イブキ、ガジェット。」

「…………いたツ……が……少なすぎる。」

「これだけ集まつてたつた四人しか適合者が出なかつた。しかも子ども。」

混乱するポケモン達を宥めようと、必死に呼びかける。しかし、野次や罵声が治まる」とはない。そんな時……あの声が。

咎めてはいけません。

静まりかえるポケモン達。天井を見上げ、無意識に声の主を探している。

彼等は、私に従つて動いただけ……。今苦しんでいる子ども達は、神に選ばれし勇者。今は、試練を受けていんとこひな……。

「貴方は誰だ！…名を聞かせて下さいッ…！」

エンペルトが、声の主に向けて叫ぶ。優しい温もりを持つその声は、ポケモン達に衝撃を与える。

私は、白き混沌……。眞実の大いなる龍、レシラム。

「レシラム……！」

二人の王と、その子達を時の帳へ向かわせるのです。私は、そこでダイアルガと待っています。

声が消え、子ども達は親に決意を伝えていた。

「ボク、神に選ばれたんだね。パパやママを守るから、心配しないでね。」

「父ちゃん、俺、もう甘ったれたりしないから……だから、だか
ら……！」

「わかった！ もう何も言つな……！！ 頑張れ！ ！」

空気の変わりよう、不適合者だった王達は畠然としている。神の登場で、こんなにも変わるものなのだろうか。いや、神だからこそ効果なのか……。

「待たせたな。」

「……セルフィオ帝王。やつぱり駄目でしたのね。」

赤い目、黄色く鋭い瞳。悪魔の目をしたミュウツー、セルフィオ帝王が姿を現した。無理矢理悪魔化することに成功したように見えるが、失敗したのだ。残念そうなオーラを纏っている。何故か首に赤いスカーフを巻いていた。

「目が変わっただけで、何も変わっちゃいない。ただな、良いモノを開発した。」

「良いモノ?」

「嗚呼。試作品はガイアに使つてもう予定だ。無論、私も使つぞ?」

笑い、スカーフをめぐりあるモノを見せる。ひし形の、黄緑色した石だつた。実はこれ、後の寄生兵器になる原型。ラルク博士とセルフィオ帝王が協力し、改良に改良を重ねて寄生兵器が誕生した。

一ヶ月後

ダークライ、ガイア黒王の右腕に変化があつた。五本指の、悪魔の腕になつていたのだ。皮膚は濃紺で、赤く鋭い爪が恐怖を呼び覚ます。最初に紹介したズルズキン、イヴイルとは違つて長さは変わつてない様子。

「これは……！」

「悪魔化、できたぞ。」

中央広場には、あの王達と適合者の子孫も達。そして、ガイア黒王とオズ陛下の姿がある。いよいよ、悪魔のいる外界へ行くのだ。

「時の帳があるのは、かつて火の国があつたアルランダ地方だな……。セルフィオ、サポーターは任せたからな？！」

「最小限の超能力しか使えなくなつたが、力になろうぜ。つと、その前にガイア……。これを。」

「ん？」

あのひし形の石を投げ渡し、セルフィオ帝王は何処かに埋め込むよつに指示。

「試作品の兵器だ。使ってくれ。」

「実験は？」

「私もあるから安心しや。ほや。」

「……そういうことか。」

悪魔の手の甲を切り裂き、傷口に石を無理矢理押し込むガイア。激痛が襲いかかったのは、言うまでもない。血に染まつた右手の傷口は直ぐ塞がり、石と皮膚が一体化した。

「ハア……。ハア……。」

「スゲー。」

黒銀のゾロアが小声で言つた。立ち上がり、ガイアは全員に向けてこう言つた。まだ苦しそうに息を荒げている。

「此処までトントン拍子に進んで來たが、もうこんな奇跡は無いぞ？！ここから先は、何が起きるか予測不可能だッ！…今日より我々

は、悪魔から世界を守る使徒……デッドバスターとして生きる」と
になる！！後戻りは出来ない！！進むのだッ！！

「「オオ——ッ！！」」

「我に続けッ！！選ばれし勇者達よッ！！」

現在

そして、無事に時の帳に辿り着き……。ディアルガとレシラムに
出会う。

彼等の住む天界も、悪魔に侵略を受けたらしい。創造者にして母で
ある、アルセウス。そして、兄弟である他の神々がマザー・コアに連
れ去られてしまった。逃げ延びたディアルガとレシラムは、長い年
月をかけて下界へ降り、彼等を導いたのだ。

いくら万能の神でも、悪魔には敵わなかつた。そんな相手に、
我々デッドバスターは戦いを挑んでいるのだな。

メンテナンスが終わり、ぐつたりしているルークを見つめながら、ガイアは心中で呟く。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン

……

「エールだな。」

苦笑いし、ガイアは扉を開ける。オレンジの十字架が模された白い盾を持ち、エールは盾で扉を叩いていた。暴走しないようにと、イヴィルがエールのパークーを掴んでいる。

「ルークは?!」

「大丈夫。いるよ。今プラグを外すから、待つてくれ。」

ガイアの言葉を聞き、エールは笑顔になる。

ヨタついて立ち上がるルーク。急いでエールの元へ向かい、抱きし

めた。イヴィルは、パークーから手を離す。

「心配かけたな。エール。」

「ルーク！」

頬ずりするエールを見つめ、ガイアはまた過去を思い出す。

回想

「よくぞ、此処まで来てくれた。」

「待つてましたよ。陛下さん。」

巨大な蒼龍と白龍。ディアルガとレシラムだ。

「エンペルトから聞いたである。あの時はフォローしてくれて助かったのだ。余が代わりにお礼を言つである。」

「いえいえ。実は、我々も悪魔の襲撃を受けて……。何とか逃げ延びて来たところなの。」

「「ええ？」」「

「悪魔の血を使った技術は、もつ会得しているな？私とレシラムの力で、血に適合したポケモンを探し出す手伝いがしたい。あと、小さな力だが加護を……。加護を受ければ、ある程度力がますはずだ。」

悪魔が下界にいるせいで、我々にとつて有毒な瘴気が世界に充満している。余り外へは出られないから、これくらいしか協力できない。

「

ディアルガが言つには、悪魔の血を飲んでいれば適合者でも不適合者でも外界で活動可能らしい。普通のポケモンだと、瘴気にやられてすぐ疲れてしまうようだ。そして、神にとつては有毒ガス。

「連れ去られてしまった、ゼクロムお兄様やパルキア兄様が心配だ

わ。お母様も、無事かどつか……。死んでしまっていたら、どうすれば……！」

レシラムはうつ向き、涙を流す。ニカツと笑つたオズは、レシラムに言つた。

「余と仲間達で、必ずアルセウス様達を助け出すのだ！だから、泣かないで欲しいのだ。」

「ありがとうございます。私達も、できるだけ協力しますわ。さあ、今日はもうお開きにしましょう。そろそろ日が沈みます。悪魔が活発に動く前に！」

頷き、神々を背に走り去る。そんな時……。

「ストップ！」

ガイアは一同を止めた。茂みに何かいると言い、搔き分けて行く。すると奥から、衰弱していいるズルズキンが四人現れた。不思議なこ

とに、内一人は悪魔化している。三人を守るように腕を伸ばしていった。

「……まだ、外界で生き延びている奴等がいたのか。」

「……そう。この四人こそが、ズルズキン四人組。ルーク、エール、シスカ、イヴィルなのだ。次回、ついに物語が始まる！！」

To be Next

序章後編・全ての原点（後書き）

【次回予告】

レシラム

「デッドバスター、ズルズキン四人組はいつも一緒に。けれど、何故かシスカだけが任務に呼ばれてバラバラに……。」

さあ、物語始まっての最初の任務です。

次回も

希望の光がありますように。」

？：四人組と悪魔

いつも一緒にズルズキン四人組。ルーク、エール、シスカ、イヴィル。ルークとエールは双子の兄弟だけど、シスカとイヴィルは義兄弟。どうやって出会い、どうやって仲間になつたのか……。彼等の日常を見ていきましょう。

「ズズズ……。」

「朝ーー！起きるーーー！」

団子状態で眠る四人組。エールはルークの腕枕で寝ていた。手加減無しでルークの背中をビシバシ叩いくエール。ルークは一気に現実へ引き戻された。

「ん？ 朝か……。」

「おはよー。」

起き上がり、ルークは残り二人を叩き起こす。猫みたいな背伸び

をするイヴィル。立ち上がり、木箱の上の携帯電話（通信機）を見つめる。ライトが赤く点滅していた。

「魔王様かラのだ。」

「昨日は昨日、今日は今日で、一体何なんだよ？」

面倒臭そうに通信機を受け取り、ルークはメッセージ機能を動かし内容を確認。三人がメッセージを聞いている傍らで、エールはルークの尻尾を抱いていた。

『おはよう。デッドバスター諸君。前回から話していた、デッドバスターの候補生から戦士が生まれた。みんなに紹介したい。並びに、上級悪魔出現の際に備え緊急訓練を執り行う！全員、基地に集まってくれ。以上だ。』

これを聞き、「おっせえんだよッ！！」とルークが怒鳴る。通信機を地面へ投げつけるふりをして、静かに窓へ入れた。

「飯歩きながら食うぞ？なんか木の実持つてけ。」

「はーい。」

ということで、四人組は橋を渡りながら朝御飯。橋に集合しつつあるテッドバスター達には、寝坊したのかと茶化され続けた。

「ほつとけ。」

「いい加減直せよな？！」

「コネで戦士になつた奴等に注意したつて無駄無駄！あはははは！」

「……。」

ルークは心中、闇に満ちた言動を吐き捨てていた。橋に近い場所に住処があるが、エールが尻尾を抱いているから歩くのが遅くなる。これを考慮しての行動であるが、周りから見たら寝坊にしか見えない。野次は承知で、四人組はこうしているのだ。

「コネ……か。一応、適合者なんだけどね。僕達。」

「まあネ。シスカが特に悪魔化して（変わつて）ナイから……カナ。

」

「ルークとイヴィルは、最初からそうだつたからいいんだよ。僕は後からだ。きっと、失明した左目が悪魔化したんだろうや……。余り変わらないのはそのせいだよ。」

明るく笑い飛ばすシスカは、何処か寂しそうな感じがする。

前回、序章後編では一人だけ悪魔化していると話しましたね？実は、二人だつたのです。

保護され、目覚めたルークの目は悪魔の目だった。眠つていたから、ガイアは気づかなかつたのだ。

因みに、デッドバスターのポケモンは共通で目が悪魔化。よつて、目で直ぐに見分けられるという訳だ。あの変化には個人差がある。目に関しては、シスカとガイア黒王、オズは例外。

そういうしている内に基地へ到着。

西地区にだけ存在する、第五ブース。そこにたたずむ赤煉瓦の館がそれだ。十七番目の国、龍の国の王カイリューが統治するブースである。

十七人しかいなかつたエリートに、更に三十人のエリートが加わることになつたらしい。これで、悪魔に対抗するだけの力がまた増えた訳だ。

「以上が、新たな仲間だ。みんな、共に頑張つて行こう!」

「「はい!!」」

「それと、上級悪魔についてだ……。昨日、チームΖΚΖのリーダー、ゾロアークのカルマが上級悪魔と遭遇した。民の救出には成功したが……奴等の力は生半可なモノではない。上級悪魔については、彼女から詳しく教えてもらうことにする。ビクティニのミラ姫だ。」

三十人の中に紛れ込んでいたポケモンは、ビクティニ。ガイアの前まで、お尻の羽で愛らしく飛んで移動。一礼してから話し始めた。

「デッドバスターの監さん、おはようございます。ビクティニのミ

ラです。私達、無事に逃れて来た神々の代行が、……アンダー研究所で悪魔の研究をしているのは、ご存知ですね？今回は、上級悪魔についての研究報告をします。

上級悪魔は、レシラム様のような大型の悪魔。その力は、神々に等しいモノです。レベル一〇〇のポケモンが何十人と集まつても、勝目はありません。ですが、私達神々の代行が祈りを捧げれば……。勝敗は五分と五分に。あとは、貴方達にかかりています。今現在、祈りを捧げる場所……【教会】という施設を建設中です。それが完成するまでは、任務中に上級悪魔と遭遇しても戦わないで、逃げて下さい。プライドに反するかもしだれませんが、退くことも勇気です。どうかお願ひ致します。」

「「？」
「……以上だ。みんな！新入りと訓練所へ向かってくれ！私は四人組と話してから行く。」

冷たい視線が、四人組を見下ろしている。エール除く三人は驚き、互いの顔を見渡す。

皆が去つてから、ラルク博士の研究所へ呼び出され一人に着いて行く。恐る恐る中へ入り、待ち構えていたラルク博士とオズを見据えた。

資料や機械だらけ、モニター やコードだらけの空間。優しい笑みを浮かべたオズは、四人組に挨拶。

「やあ。ズキン四人組さん。」

「あれ？オズ、なんで君も？てゆーかいつの間に？！」

「ああ、彼もなんだよ。ね？黒王様。」

ラルク博士は、すかさずオズをフォロー。黒王ガイアは、そうだと頷く。本当の理由は……四人組の話しが終わつた後で。

四人組が呼び出された訳だが、主にルークとイヴィルに用がある。最初から悪魔化していたという彼等は、いつどうやって悪魔の血を得たのか……。月一尋問を受けるのだが、彼等の答えはこうだ。

「知らねえよ！……」一つの間にかこうだつたんだ。イヴィルだつて、なあ？！」

「グルルル。」

「戦闘した試しは？」

「わからんつての。いつまで尋問する気だ？何年間も質問責めはキツイぜ……。」

「マザー「コアのスパイという噂もある。お前達一人は、要注意人物なんだ。」

「なんだよスパイって……。じゃあ俺達を助けなきゃよかつたじゃねえかッ！！」

「まあまあまあ、ストップストップ。落ち着いて。黒王様、ここは俺が……。」

オズが割つて入り、冷静に対応。

「なあ、ルーク。俺から聞いていいか？一応、みんなを説得する役があるからさ。内容は同じだろうが、今一度聞きたいんだ。でなきや、周りのデッドバスターは納得しないだろうし……。マザーのスパイだなんて、俺は思いたくない。」

「……。わかったよ。」

「ありがとう。」

なんとか丸め込み、オズはほっと一息。いつもより穏やかな笑みを浮かべた。

四人の尋問官に、ルークは詳しく説明。いつもの内容を話した。

ルークとエールは、物心ついた時からずっと二人きり。アンダーワールドなんて知らなかつた。そんな時代……。

「荒れ果てた大地……。枯れ木の森を渡りながら、俺達はただただ歩いていた。俺が悪魔化していたのは、その時からだ。悪魔に襲われているシス力を助けて、一人さ迷うイヴィルと戦い……。今の状態に至るって訳さ。」

「イヴィルは最初から？」

「嗚呼。この姿で出会つた。」

「うか。そう言って、オズは引き下がる。

「ありがとうな。」

「話しされだけじゃありませんわ。」

ビクトィニの姫、ミラは五人を見渡し言つた。絶対に無謀な挑戦をしないでくれと。

「貴方達は、幾多の逆境を無理矢理乗り越えて来たと聞いています。あと、魔王も。」

「うぐっ。わ……私は……えっと……。」

「貴方達には、強く念を押しておきます！！上級悪魔を倒す手掛かりはありません。私達が祈り、直接、ディアルガ様とレシラム様を手助けし……加護を増幅するしか無いのです。だから、任務中に出くわしたら逃げて下さいッ！！いいですね？！」

「「は……はい。」「

「わかれればいいのです。」

ビクティニの小さな体から放たれた気迫に、四人組も一人の王もたじたじ。本当に無茶しないでよ?と、ラルク博士は彼等に言つ。

「よ……よし。次に、四人組には悪魔の階級について学んでもらおうか。博士。」

悪魔については、本来なら訓練施設で学ぶもの。四人組はまだ知識不足で、黒王が時間のある日に勉強をするのだ。

「悪魔には三つのタイプがある……。これは以前話したな?複数のタイプを持つていたりはしない。しかし、ポケモンを喰つているが故にタイプエネルギーが蓄積している。これは、最近の研究でわかつた事だ。」

「つまり、ポケモンと同じような弱点があるんですね!」

「シスカ、正解だ。けれど、それは上級悪魔だけの話しだ。」

悪魔には階級がある。初級・中級・そして、今回新たに現れた上級悪魔。階級が上がるに連れて、レベルの上限が変わつてくる。

我々が使う技には限界があるが、寄生兵器に技タイプエネルギーを注ぎ入れれば、より強力な技を発動できる。」

「上限はだいたいどれくらいなんだ？」

「初級は、三〇～約九〇程度。中級は、約一〇〇～約一五〇。それ以上が上級。中には、二〇〇を超えるレベルの悪魔だつているだろう……。」

ガイアは自分が言つたことをおぞましく思った。これが悪魔。無限に成長するのだと、彼は改めて知つた。オズも、ラルク博士も、四人組もだ。

「カルマが出会つた上級悪魔は、ケルベロス。岩の体を持つ悪魔だつたらしい。」

「超小型通信機で、彼が写メつてきた映像があるよ。」

メインコンピュータに向かい、ラルク博士は映像をモニターに移す。

ケルベロスは、岩の狼。尾は三匹の大蛇だった。大蛇は岩の体ではなかつたのが、ガイア黒王は気掛かりらしい。

「上級悪魔については、まだ研究し始めたばかりだ……。もしかしたら、悪魔としてのタイプは一つだけでも、蓄積したタイプエネルギーは複数所有しているかもしない。そうなると、戦いはより困難なものになる。……ルーク。」

「おう。」

「私もだが、絶対無茶はするな！－エールは、お前がいなくてはならないんだろう？絶対に死に行くような真似はするな！－わかつたな？」

「言われなくともわかつてゐるさ。エールは一人にさせない。ずっと一緒にさ。な？ エール。」

ルークが振り返ると、エールは尻尾を抱いて頬擦りしていた。赤ん坊のようなエールを見て、ルークは微笑む。

やれやれだな。と、オズは早々と外へ。ガイアに止められると、散歩したらまた来ます。と言つていなくなつた。

「気まぐれ屋め……。」

「四人組、今日はもう訓練に行きなよ。黒王は、まだ僕達と話しがあるからあとから。ね？」

「嗚呼。先に行つてくれ。」

一礼して、四人組は研究所をあとにする。研究所の外では、物陰に隠れて四人組が去るのを待っていたオズが、一息ついてから、中へ入つた。

「ふう。」

「こいつの台詞だ。さて……。ここから先は極秘会議だな。ちょうど、セルフィオが回線に入り込んで来たようだからな。」

黒王ガイアは、『M?』と表示されている一つのモニターを指差す。モニターから、男性の笑い声がした。

「流石だな！機械でもさつそつと氣づくんだなんて……。」

「私は耳が良いからな。ちょっとした音でわかるんだよ。……それより話しだな。」

三人の王とラルク博士、ミラ姫の極秘会話が始まった。内容は、神々の代行についてだ。

神々の代行……。それは、文字通り神々の代わりに働くポケモン達のこと。神の数より多く存在し、各地で民と暮らし、常にみんなの心の支えとなっていた。災害があれば駆けつけ、暮らししが困難なら知恵を『』える。時には自分達の力を使って、みんなを助ける。それが仕事。

今は、悪魔の魔の手からポケモン達を守るのが仕事だ。代行の半数は、まだ外界で取り残されたポケモン達の救助活動をしている。デッジバスターへ完全に引き継ぎをするのではなく、代行は代行なりにデッジバスター達の手伝いをしているのだ。

「みんな、危険は承知。もしものことがあつたら、通信石を壊すようここに書いてますから。」

「え?...壊しちゃうの?」

「そうすれば、代行全てのクリスタルが赤く輝きます。それで判断するんです。ラルク博士。」

「はいはい。」

「早速ですが、外界の代行達からの救難信号があつた場所をモニタに……。」

「了解）。」

セルフィオがハッキングしたモニター以外、モニター一つ一つでパズルのように巨大な地図を作る。この大陸は、アスナロ地方。かつて火の国があつた場所だ。

「赤い丸印がある場所から、救難信号があつたんだ。つまり、クリスタルを壊したってこと。」

送り主は一人。ランドロス陸神様と、鋼の賢者「バルオン。ミラ姫、理由は？」

手持ちのパソコンを開き、博士はミラ姫の話しをメモ。片手タイピングなのに凄いスピードだ。

「ランドロスは、悪魔に祠を壊されて脱出不可能になつたそうです。コバルトンは……私達ではわかりません。何があつたのでしょうか……。」

「姫、コバルトンは代行なのですか？」

「違います。セルフィオさん。彼は神帝様の木を守る賢者。聖なる木、と言えばわかりますね？」

聖なる木。それは、アルセウスの木とも言われている光色の神木のこと。世界各地にあり、悪魔はこの木の光を苦手としている。それゆえ、現在は避難所とされている。本当の存在意味は、誰も知らない。

「賢者は、代行と民が着くまでここを守るのが仕事。なのですが……。彼に渡したクリスタルが壊れたということは、悪魔が……。」

「何はともあれ、私達の出番だ。オズ、今回はお前も来い。」

「わかつたである。」

「団結する一人に、ヘルプが来るまで、また研究をしていくか……。と、セルフィオは去る。

彼は不適合者。でも、寄生兵器を生み出した第一人者としてテッドバスターをしている。肩書きだけで、普段は自室の研究室に籠りっぱなしだが。

「また物騒なモノを作ってるであるかな? セルフィオ。」

「知るか……。他の『テッドバスター』には話せない極秘任務だ。夜に出発しよう。」

「了解なのだ。では、余は基地の訓練所へ向かう。早くしなきゃ皆が不満に思うからな。」

にかつーと笑い、オズは早々と去った。一息ついたガイアは、ラ

ルク博士から回覧板をもらつ。回覧板には、名簿が貼つてある。今は十七人しかいないが……。これを使って、今日の任務にあたるデッドバスターを選ぶのだ。

今日の任務は、シェリア地方エリアー。水の都と言っていた国だ。

「……。シスカとミズキにしよう。あの二人なら、多少の危険も切り抜けてくれる。博士、早速呼んで下さい。」

「はいはーい

本線基地・訓練所

ルークは、エールと兵器を使う練習中。せめて、ルーク達を守れるようにと黒王から言われている。柔道の試合で見かける床を使って、二人は組み手をし続けた。

「ちゃんと盾を顔まで上げて!! 危ないぞ?!!」

「う……うそ。」

ピンポンパンポーン

『お呼び出しをします！チーム悪党のシスカくーん。チーム泉のミズキちゃん。出番ですよー 僕の研究所まできつてねえー』

陽気なホールが訓練所に響き渡る。テッドバスター達は、思わず苦笑い。訓練しながら聞いていた者は、笑いを耐えるために皆が立ち止まつた。ちょうど、シスカとミズキは激しく戦つていた。

「ストップ。……呼び出し。」

「そうね。行きましょうか。独眼のズルズキンさん。」

「フフ。」

険悪なムードなのに、シスカは笑つた。急いで研究所まで向かう

一人は、スピードで張り合っていた。

「ついた。ワタクシの勝ちですわね……。」

「みたいだね。」

中へ入ると、いつも出迎え。ラルク博士の呑気ぶりは、場違い過ぎていつも対応に困る。他の「テッドバスター」達だってそうだ。

「黒王様、お待たせしました。水の国の姫、ミズキ。ただいま着きましたよ。」

「口調が母に似てきたな……ミズキ。ピアン王女は元気か?」

「ええ。今回の任務はなんですか?」

「今回はシヒリアへ行つてもうつ。任務は、スワンの森にある【海の宝玉】を悪魔から取り返すことだ。」

「宝玉を飲み込んだんだってー。で、宝玉を飲み込んだ悪魔は中級階級。群れのリーダーだね。未だ暴走を続いているからダンジョンの悪魔達も凄く凶暴だよ。気をつけてね。」

「せー！」

ラルク博士はメインコンピュータに向かう。ぽちっとボタンを押して、部屋の右壁にある鉄の扉を開けた。中には、白く光るモンスター・ボール型の台。ドサイドン一人分の大きさをしているため、かなり巨大だ。

「二人共々、予め武器を出してね。」

まだ寄生兵器を出していない二人は、左胸に手を当てる。黄緑色に光輝く胸から手を離すと、粒子が手元に集まってきた。ミズキは粒子を体に纏つて武器化。シスカは、手元にある状態で武器化させた。

「悪いレイピア。装備完了。」

「水の羽衣。装備完了ですわ。」

「よし……。行き先、座標二三〇七。シェリア地方エリアーの集落。デッドバスター、転・送つ！」

手持ちパソコンのエンターキーを押して、機械を動かす。まばゆい光りに包まれて、二人はあつという間に集落に着く。赤い布で出来た、大きなテントの中だった。

「さて……。ここにリーダーに会いましょう。ワタクシの足で悪いにはならないで下さいね？シスカさん。」

「足で悪い？大丈夫。ならないよ。たぶんね。」

デッドバスター基地
オペレーションルーム

巨大なモニターの前には、大学にありそうな席。全部で十段のこの席には、パソコンに向つ百人のポケモン達。みんなエスパータイプ。

ここ^タで、任務中の^{ゲット}テッドバスター達の位置やステータスを管理。悪魔^タの確認をすることも可能だ。

ここ^タの指揮官は、セルフィオ帝王。任務がある日はここで仕事をしている。一人、ど真ん中の席で^タ大モニターを見つめていた。

鬼が出るか蛇が出るか……。藍色の玉は無事か否か……。そして、レシラムとティアルガにコンタクトを取るかな。

かくして、最初のミッションがスタートするのだった。次回、シスカとミズキの活躍にご期待下さい。

To be Next

【次回予告】

レシラム

「悪魔に立ち向かう、デッドバスターのポケモン達……。

私達はただ、彼等を見守ることしかできない。無慈悲だとわかつて
いても。

次回も祈りましょ。

愛しい子等に、希望の光を。」

？：死んだ世界

シェリア地方の集落、エリアー。

到着した彼等を出迎えたのは、丸い盾を持つドレーディア。草の国の姫で、母が不適合者のため生まれつき技が使えない。

「ミズキ姫！お久しぶり」

「久しぶり。その様子だと、大丈夫そうね。任務のため、情報が欲しいのだけれど？」

「海の宝玉を取りに来たのね。わかつたわ！情報小屋へ行きましょう！」

小走りでログハウスに向かう彼女を追い、中へ。情報小屋と言われるこの場所は、ラルク博士の研究室よりひどかった。

狭い部屋に五台のパソコン。本と紙束の山でほとんどスペースが埋まっている。しかも、床には無数のコード。迂闊に歩くことができない。

「バーバラ。バーバラいらっしゃる？」ナッシュバスターが到着しまし

たよー」

「はいはーい。」

紙の山がゴソゴソ動いている。ぼんツーーーといきなり顔を出して登場するは、グルグル眼鏡のバリヤード。波を搔き分けて、三人の前にやって来た。

「あら？ 貴方、アルランダ地方の集落でもお会いしてしませんこと？」

「ああ、それはオイラの再従兄弟か従兄弟だね。オイラ達は、一族で悪魔研究家をしているんだ。」

バーバラは、デッドスター達に写真を見せてあげた。見た感想といえば……。

「「全員、バリヤード……。」」

「ね？右端にいるのが、アスナロのバー・バラ。あと、後ろにいる彼も。オイラはこれね？……さて、お喋りはこのくらいにして、情報提供しなきゃね。ちょっと待って！」

再び紙の山にダイブ。無数の原稿用紙が宙を舞つた。

あれ？と思った方のために説明しましょう。アルランダは火の国、アスナロ……と、バー・バラは言いましたね。これはエスパーの国特有の呼び方、言わば訛つた呼び方なのです。エスパーの民は、アルランダのように詰まつた発音が少し苦手。そのため、言いやすい発音に変えて呼んでいるのだ。

「ちょっと、あの人大丈夫なの？」

「大丈夫よ。エスパーの中でトップクラスの個体値を持つ一族ですもの。」

「個体値？」

疑問に思つたのはシスカ。ミズキは彼を嘲笑い、個体値について教えることに。

「あら、そんなことも知らないの？聞いて呆れるわね……。私達ボケモンには、生まれ持つ才能があるの。私達デッドバスターは、それを【個体値】と呼んでいるわ。ゼロから六の数値で表すことができて、記号は＼を使うの。ちなみにワタクシは四＼……。」

「四……。強いな。」

「個体値は、親から子へ受け継がれるもの。デッドバスターなら知つてて当然でしょう？」

冷ややか目で、ミズキはシスカを見やる。シスカ本人は、苦笑いするしかなかつた。

「お待たせー！」

最初と同じ登場をし、バーバラは三人の元へ。紙と紙をくつづけてできた本を持っていた。

「えっと、ダンジョンはスワンの森だね。ここには、レベル七〇か

ら一〇一の悪魔がいるよ。

「写真見て。このカラス頭のサルは、ガーモンと呼んでる初級悪魔。スピードが早いから、ズルズキンのシスカは気をつけてね？ 次にコイツ。ゾンビ魚人。毒水を自由自在に泳ぐことができるパワー型悪魔だよ。腕にあるヒレは鋭いカッター……しかも毒針がある。川を背にしないよう心がけて。

さて、基本レベルはこれくらいかな？ 本丸は「コイツだよ。」

パラパラとページをめぐり、ターゲットとなる中級悪魔を見せる。写真ではなく、白黒のスケッチだつた。

このスケッチを見て、デッドバスター達は目を疑つた。こんなことがあつていいのか？ だつてこの姿は……！！

シスカは、現実を受け入れることができなかつた。

この悪魔の名はヘルオーガ。カイオーガに瓜二つの姿をしている、スワンの森の悪魔を仕切るボス。バーバラは、宝玉を飲み込んでこの姿になつたのではないかと睨んでいるようだ。宝玉を飲み込んだことで、この星のありとあらゆる水をいのままに操ることが可能になつた。ヘルオーガが原因で、毒の水が世界中を被い尽くしたのだ。

「ヘルオーガから宝玉を取り返せば、川も海も元に戻せるかもしない……。こんなに似てるから、抵抗感があるのはよくわかるけど……。」

「言わなくていいよ。わかってる……。」

レイピアを握りしめ、シスカはスケッチのヘルオーガを睨み付けた。

「僕等がやらなきゃ、世界は死んだままなんだ。アルセウスが愛したこの世界を、何があつても守らなきゃいけない！やるよ。僕は行く……スワンの森へ！……」

「ワタクシだつて戦いますわ。ここは、ワタクシ達水の民の国ですもの！」

「ありがとう。独眼のズルズキン。スワンナの姫様……。ヘルオーガは、ダンジョンの奥地にある【スワンの泉】にいる。道中気をつけてね？」

情報小屋を出て、シスカ達は青いテントの中に。棚いっぽいにアイテムが置かれていた。

「ここは？」

「ええ？！まさか、アイテムテントすら知らないの？！もう、どれだけ無知のかしらッ！！

ここは、アンダー研究所から転送されて来た武器や、ダンジョンで拾つてきたアイテムがある場所。アイテムテントよ。回復薬と交換して入手する。回復薬一つにつき、三つまでもらえるわ。……貴方達四人組つて、まさか装備品を使わないの？」

「うん。ルーク達といると、真っ直ぐダンジョンに入つて行くからね。初体験ばかりで楽しいよ。」

笑顔のシスカを見て、ドレディアも呆氣。一人で目を皿にして、ぽかーんとしている。ズルズキン四人組のバスター活動は、大仰天どころではない超危険なモノだったようだ。

「普通死ぬわよ……貴方。」

「そうね、危ないわ。」

「あはは。……で、人は？」

「いりでーす！」

入口から向かって正面。アイテムに紛れている一人の小さなポケモンがいた。棚に腰かけ、手を振っている。この一人は、カメールとハスボー。この地方のダンジョンを巡りアイテムを集めてくる探索隊だ。

「何にしますかー？」

「そうね……。鉄のフレートと、悪魔の爪を二つづつ。神秘の靈と、この独眼さんにチーンの鎧を一組あげて。」

ミズキが勝手にオーダー。次からは自分で決めなさいよと、ふてぶてしい顔を見せつける。シスカがお礼を言つものだから、あたふたと次の態度を考え込む。とりあえず、ミズキはそっぽを向くこと

にした。

陽気な声でハスボーが到着。頭の葉っぱにアイテムを乗せて歩いて来た。

「ここで、アイテムの説明を致しましょう。

鉄のプレート。厚さ一五センチの四角いプレート。真ん中に半円ドーナツの持ち手があり、盾にできる。ただし強度が低いため、三回防御したら壊れてしまう。

悪魔の爪。見たまんま名前のまま。悪魔の赤い爪だ。先制の爪より発動確率は低いが、攻撃力を二段階上げてくれる。

チーンの鎧。剣を扱うバスター専用アイテム。装備すると、防御力を少し上げてくれる。アンダー研究所の発明品だ。

神秘の雲は……みなさんわかりますね？

「ありがとうございます。」

「頑張つて来ますわ。」

「はーい。回復薬ありがとひいじますーー!」無事を祈りますね
!」

アイテムを装備し、回復薬を渡す。『ツッドバスター』と『レディア
はテントを出こと』。

「よいしょ。……あ!貴方様は!-!」

ドレディアを驚かせた相手は、レジスチル。全ての代行ポケモン
を統べる王、レジギガスの忠実な下僕しもべであり、民を守る賢者。
なにやら、大事そうに何かを抱えている。

「私物ヲ整理シテイタラ、コレガ出テキタ。御守リ一持ツテ行ツテ
クレ……。キット役ニ立ツ。」

手渡されたのは、【青いウロコ】。レジスチルの手から取つて見
ると、風景が微かに透けて見えた。綺麗な青に染まつたそのウロコ
の正体……ミズキはわかつっていた。

ズシ…ズシン

渡し終わって直ぐ、レジスチルは無言で去つていった。ゴーレム故、コミュニケーションはこの程度。けれど、彼の後ろ姿から伝わつてくる。闇に対する不安と恐怖、悪魔への怒りが。

「……さあ、装備できたことですし。ダンジョンの入口へ案内しますね。ついて来て下さい。」

スワンの森入口

枯れ木だらけの樹海、ひび割れた大地……。ここが、今現在の世界だ。川は清水ではなく毒の水が流れついて、コイキングやバスマスターの白骨死体が浮いている。少し奥を覗いてみると、ポケモンの死肉が転がっていた。

「「う……腐敗臭で鼻が曲がる。」

「男なら耐えてみせなさい！」

「わかつてゐよ。日が落ちたら、何があつても戻らなきやね……。
夜は、悪魔の力が高まる時だから。」

森から田を離し、後ろのドレーディアにお礼を言つ。『無事で。ヒ
ドレーディアは精一杯の応援で二人を見送つた。

この様子は、オペレーショナルームからも確認されている。今現在、
巨大モニターにはプレシャースポールが映つている。最初はゴージャ
スボールなのだが、デッドバスターがダンジョンへ侵入するとプレ
シャスボールに変わるのだ。

セルフィオ帝王は、迅速な指示でポケモン達を指揮する。

「上空で待機している飛行カメラを起動、ダンジョンマップを映せ！
！出動したデッドバスター達のステータスを急げ！！」

「飛行カメラ、起動！悪魔サーチシステム、オート設定。マップ及

びステータス、モニターに映しました！」

慌ただしいオペレーションルーム内……。僅かな光に照らされた壁には、揺らめく影が。この影はおそらく、黒王ガイア。気づいていないセルフィオは、再びモニターを見つめる。大量にいる赤い丸と、二つの青い丸がうごめく光景。シスカ達は悪魔と戦っているのだ。

「頑張つてくれ！『テッドバスター……！』

「お前もだらり？..」

傍らから声。あからさまに驚いた仕草をするセルフィオに対し、笑っているのはやはり彼。

「ガイア……。いたのか。」

「いたさ。状況は、こちらの優勢みたいだな。」

「ああ。けどいいのか？四人組は、全員そろわなきや力を發揮できないんだろう。これでシスカが死んだとなれば……。」

終始無言。ガイアは何も言わず、辺りは沈黙に染まる。

「…………？」

「セルフイオッ！」

「わかつているッ！？」

一触即発の事態か？！ガイアは影となり、闇の中を搔き分けて外へ。デッドバスター基地へ向かつた。

一方セルフイオは、机の裏を膝で蹴り上げ、内蔵されている非常システムを無理矢理立ち上げた。白いキーボードが現れ、自身の周りには無数のモニター。マイク付きヘッドホンを首にかけ、タイピング開始。

この時、二人王の形相は、焦りと不安に満ちていた。

スワンの森

ガーモンの群れに取り囲まれたシスカとミズキ。運悪く、バラバラになってしまって協力できない。盾を構えて、防御の態勢。シスカの盾には亀裂が入っている。もうあとが無い。

「……来い！」

シスカの挑発で、雄叫びを上げて迫り来るガーモンの群れ。ミズキの方も同様だ。

レイピアを地面に突き刺し、毒エネルギーと炎エネルギーを注ぎ入れる。二つ同時に、シスカは少し苦しそう。

「ぐ……ツ……つおお――――！」

レイピアが激しく輝き、ガーモン達の真下で大爆発。紫の炎が燃え上がり、身を焦がす。その真ん中で、シスカは剣に身を委ねる。呼吸は荒く、ぐつたりしていた。

燃える炎の中からは断末魔の叫び。目に映るは悲惨な時代劇。左目が、妙につづいた。

「……。」

sa id // ミズキ。迫り来るガーモンをはね除けるべく、水の羽衣を脱いで武器に。リボンのように扱われる羽衣は、見事に悪魔を遠くへ飛ばした。シスカの炎の中へ転がる奴もいる。

「あなどらないでくださる?」

赤い光を纏い、再び羽衣を着る。ミズキは天高く飛び上がって、シスカの状態を確認した。

もうバテてる。仕方ないわね。

「“ブレイブバード”！」

ガーモンに向かつて突つ込むミズキ。捨て身の体当たりは一発でガーモンを倒す。まだまだと攻撃を続ける内に、体力が減っていく。“ブレイブバード”を繰り出すと、自分にもダメージが蓄積してしまう。言わば諸刃の剣だ。

「いけない！……さやあ！！」

動きが鈍ったところをガーモンに襲われ、翼が折れた。地に落ちて、首を握りしめられる。

「シス……カ……！」

「ミズキ！……どうしよう……炎が止まない……あーッ！……僕の馬鹿……！」

レイピアを抜き取つて、炎の中へ身を投げ出す。火だるま状態で、ミズキを襲うガーモンにレイピアを投げつけ……たはいいのだけれども。

「あつ・・・あ、あーひひひひひひひ・・・」

自滅フラグ。

「ホント仕方ない人。」

走り回るシスカに狙いを定め、“水鉄砲”をしばらく浴びせた。

シユウウウウ

「おさまったわね。」

「ありがとうミズキ。死ぬかと思つたよ。」

「そのオツムをどうにかしなさい。少しさマシになつてもうないと、ワタクシの命だつて危うくなるじゃない?!」

「『』めん。」

オペレーション ルーム

ステータスゲージ、ミズキはマイナス一〇のダメージ。シスカはもう半分。危機一髪。セルフィオ帝王は机に寝そべって、ヒリヒリする膝と戦っていた。

一番上の段、隅っここの席でヤドキングが手を合わせている。御愁傷様と言いたいらしい。

「焦らすな……。膝が……皿が割れるかと……。」

「けつこう手荒い対応だったからな。」

ガイア黒王の姿あり。あの光景を見た第一人者は、ニヤニヤ笑つてモニターを見ていた。

「通信機をかせ。」

超能力で通信機をテレポートさせ、右手を差し出すガイアに渡す。ぐつたりしたまま、唸りっぱなしのセルフイオであった。

「力使い果たすなよ？明日の夜に任務だ。」

「うム……。」

スワンの森

悪魔はまだいる。

倒したガーモンからレイピアを抜き取つて、構える。懐から回復薬を取り出して食べ、まだ余裕だと見せつける。

「来るわよー！」

「モグモグ……。」

向かつて行く、デッドバスターと悪魔。刹那の一撃がぶつかり合い、血濺きと踊る。正義の殺戮劇は、赤く美しい花を散らせて終盤へ。

花弁にまみれたシスカは、ゾンビ魚人に後ろを取られてしまう。斜め下を見ると、川が。

「うああッー！」

背中を切り裂かれ、瀕死状態に。シスカは、気絶して倒れてしまつた。

「シスカアーー！」

「諦めるのは早いぜ？」

ゾンビ魚人の背後から、声。魚人の背後には枯れ木しかない。ミズキは、その枯れ木を見つめていた。

魚人の背に手を当てる何か。ニヤリと笑って、技名をつぶやく。

「“ナイトバースト”。」

瞬間、森に再び大爆発が起きる。赤い稻妻を帯びた黒いドームは、集落からも見えている。

「あれは、“ナイトバースト”？」

「リリア姫ー！」

赤いハチマキを付けたピカチュウが、携帯電話（通信機）を持つてドレディアの元へ。

黒王からだと、ピカチュウは言つ。通信機を受け取り、ドレティアは黒王と対話。

「エリアリーダー、リリアです。」

『私だ。緊急事態により、デッドバスターをもう一人派遣した。名はカルマ。ゾロアークだ。』

「緊急事態? はい。 はい。わかりました。失礼します。」

通信を切り、森の方角を見つめるドレティア。ピカチュウも一緒に、森を見つめた。

「神帝アルセウスよ.....。生きていたら、どうか、彼等をお守り下さい。」

スワーンの森

「ふい～……。大丈夫かい？」

“ナイトバースト”が止み、現れたのは黒銀のゾロアーク。カルマ。毒水に触れないようにと、幻影の……何故かソリに乗っている。雪があれば子どもが遊ぶだろうに。

彼の技からシスカを守るため、ミズキは盾を構えていた。

「なんで、貴方が？」

「ん？なんか急に、黒王様が緊急派遣だつて言つてさ。助けに來た
といつ訳。よろしくな！……さて。」

降りて、幻影を解く。シスカの元へ歩みより、傷の具合を冷静に
確認。ミズキも一緒になつて見守る。

大きくなつていて、若干骨が露出していた。

髪に手を突つ込み、コルク栓でフタをした小瓶を取り出した。中
には、黄緑の液体が入っている。

「液状回復薬だ。支給される固形の回復薬とは違つて、傷口にかけ
ると細胞分裂を活性化させるんだ。止血の際によく使つてる。……
見てな。」

栓を抜き、液体をシスカの背中にかける。傷口はみるみる少しく
なり、いつの間にか止血もされて綺麗に無くなつた。

「あとは、普通の回復薬を飲ませるだけ。てか、まず起こすか。シ
スカ、シスカ起きんしゃい！」

ビンタで起こされ、シスカは痛そうに起き上がる。背中の傷が無
くなつていて、更にカルマがいてビックリ。手短に説明を受け、と
りあえず回復薬を食べる。

「あ、行こうか。もう少しで泉につく。早いところ終わらせてよつ
が?……シスカ。」

「うん?」

「まだ液体の余ってるからや、お前の左耳にかけてやろうか？治るぞ。」

「い、いいよ。僕はこのままがいいんだ。」

「そ……。じゃあ出発……」

クリスタルの鎌片手に、意氣揚々と歩き出すゾロアーク。カルマ。二人も後を追つて歩く。

「枯れ木は毒水を吸つて、色が黒く変色。川には白骨死体。ちょっと歩けば……腐敗したポケモンの死肉がゴロゴロ。死んでるなあ、この世界は。なんとかしなきゃならねえよ！」

呑気に背伸びをするカルマに、ミズキは冷ややかな目を向ける。場違いはラルク博士で十分だと怒った。

「貴方つて人は……」

「静かにー。」

鎌を構え、何か聞いている。耳をすませると、悪魔の鳴き声が聞こえてくる。

普通の悪魔は、赤ん坊の声やライオンの声で鳴く。しかし、聞こえているのはそれとは違ひ叫び。

オオーーン……

「まだだ。泉からつてことは、ヘルオーガ?!」

「行きましゅうー。」

オペレーション

非常事態のブザーが鳴り響いているこの場所で、ガイアが行くなと叫んでいる。個人のモニターで作業をするポケモン達も、慌ただしくしている。

「泉から、強力なエネルギーを確認！一〇一、九……え、エラー？！セルフィオ様、計測不可能です！！」

「レベル一一五、一二〇、四七……。なんで？！レベルが上がっていく！」

「悪魔はいい！宝玉の状態を確認しろ！！」

「セルフィオ、これは……。」

「お相手は【上級悪魔】とはなー！一枚噛まされたッー！」

ガイアから通信機をもらっていたセルフィオ。裏を開けてキーボードの横に差し込むと、カルマへ着信を鳴らした。

モニターに映る、三つの青い丸。泉の中へ侵入したテッドバスター達は、ゆっくりと奥地へ入つて行く。泉の中へ侵入したテッドバスター達は、ゆっくりと奥地へ入つて行く。罠とも知らず……。

To be Next

？：死んだ世界（後書き）

【次回予告】

レシラム

「死んだ世界……。

汚れた宝玉……。

力を温存していたために、上級悪魔と氣づかなかつたテッドバスター
一達。

このままでは……！

次回も祈りましょ'つ。

愛しい子等に、希望の光を。

？・緊急リッシュション…画面を奪還せよ…！

遠く離れた地方。無事に保護されたであらう、傷ついたポケモン達が集落に集まっている。彼等を先導しているのは、下半身が雲に隠れている縁のポケモン……トルネロス。片足を失った一人のケンタロスを支えている。

「もうすぐ集落だからな。」

「はい。」

ふと、正面へ振り返るとハピナスがこちらへ向かってきている。救護班の者だらう。

「お勤め！苦労様です！風神様！」

「ワシが連れてきた民は、この者で最後だ。あとは任せてよいな？」

「はい。」

ケンタロスをハピナスに預け、トルネロスはまた民を探しに行つた。時速八〇キロのスピードで、上空から念入りに見て回る。

トルネロス!!

「?！」

清らかな声がトルネロスを引き止める。声の主は、男性。トルネロスは血相を変え、主の名を叫んだ。

「ディアルガ様?！」

トルネロス、今すぐスワンの泉に向かってくれ!! 時の流れが、どんどん闇へ向かっているのだ!!

「闇に……?! 承知しましたッ!! このトルネロス、無事に辿り着いてみせます!!」

時速二〇〇キロのフルスピードで、トルネロスはスワンの森を曰指す。ディアルガからの説明を受けながら。

所変わつて、スワンの泉。モンスター・ボールを模した巨大な泉だつた。足場は、中央の丸い部分。さつきまでの咆哮は無く、ヘルオーガの姿さえ見えない。

「やけに静かだな……。」

「泉が……。聖なる水が、毒の水に……。」

ミズキは、変わり果てた泉を見て落胆。話してしか聞いていないから、本来の姿はわからない。だけど、どれほど立派な場所だつかは想像できる。ミズキは、怒りで鬪志を燃やした。

“ハハハハハ……”

突如地面が揺れた。デッドバスター達は足場で跪き、揺れに耐えている。

揺れにより、岩壁が崩れて落石。運悪く、出入口の方でそれは起きた。退路を断たれた【デッドバスター】達は、震だということに気づく。気づいた頃に、カルマへ通信が入った。

「はいはい。」

『『セルフィオだッ！今すぐに戻れ！相手は上級悪魔だつたんだ、震にかかる前に……』』

「申し訳ありませんが、もう手遅れです。できれば……戦闘許可を下さい。あと葬儀。やれるだけやりますが、死ぬ気満々なんですよ……俺ら。」

縁起でもないことを言い、カルマは通信を切る。そして、相手が上級悪魔だと一人に話した。

【上級悪魔】と聞いても、一人に驚きの色は無かつた。むしろやる気になつている。

「やれりー僕等だけでもーー！」

「カイオーガ様の泉は、このワタクシが取り返すわーどのみち、宝玉だつて回収しなきやいけないんだしね。」

頭をかきむしり、カルマは苦笑い。「じゃあやるか?！」と、立ち上がり鎌を構える。カルマに続き、一人も戦闘態勢へ。ヘルオーガの咆哮が泉に響き、地震がピタリと止んだ。

毒の水柱が立ち、中から巨大な悪魔が現れる。その姿はカイオーガに瓜二つ。背ビレは一つ。サメのヒレに、手のよつた左右のヒレは鎌。濃紺の皮膚をした、赤い三つ目のシャチ……ヘルオーガ。飛び上がったヘルオーガは、そのまま真下へ落下。毒の水をテッドバスター達に浴びせた。

「ぐッー！」

「うわっぶーー！」

「あやああー！」

水を浴びた『テッドバスター』達の目の前に、ヘルオーガが再び現れる。三つ目がにやりと笑っているような、そんな気がした。

「こんのおーー！」

ミズキの“水の波動”。真っ直ぐ走る波動は、ヘルオーガを直撃。衝撃で煙が立っている。痛そうにするヘルオーガだが、煙が晴れてみるとどうだろ？……。

「無傷？！」

「次は僕の番だッ！」

レイピア片手にシスカが走る。格闘エネルギーをレイピアに注ぎ、ヘルオーガへ剣先を向ける。

「はああああッ！－！」

鎌のヒレで防御し、ヘルオーガはシスカを弾き飛ばす。飛び石の
ように転がり回り、シスカはあつという間に傷だらけ。
傷には血がにじんでいて、膝部分の皮が破けて穴が空いてしまつ
た。

「う……うう。」

「シスカ！」

駆け寄ろうとする一人に、異変。突如目眩が襲いかかった。鎌を
地面に突き刺し、武器に寄りかかる。カルマの脳裏には、浴びた毒
の水が移る。ギリ、ギリと歯を噛みしめ、状態異常になつたと悟つた。

「毒消しはちょ「うび」三つ……。けど、この水の濃さからして猛毒ど
ころじやねえよな。完全には抜けないかもだが、ミズキ！」

カルマの呼びかけに振り返つて、毒消しの固形薬を投げ渡される。

「俺が時間を稼ぐから、シスカを頼む！お前の分の毒消しも渡したから、飲んどけ。」

自分も毒消しを飲み、鎌を引き抜いてヘルオーガへ迫る。

「いぐぞ偽者——ツ！—！」

迫り来るカルマ、ヘルオーガは口から氷の矢を放ち、行く手を阻む。

華麗に舞い踊り、矢を粉碎して進む。プロの意地を見せつけるカルマ、一定距離を置いてナイトバーストを放つ。

爆風からシスカを守ろうと、ミズキは彼を抱き抱えた。

ナイトバーストが止み、カルマはヘルオーガを見据える。右目を潰しただけで、ほとんど無傷だった。

「やるな……。」

大ジャンプし、カルマはヘルオーガの背に。刃を突き刺し、切り

刻もうとした。うめき声を上げ、ヘルオーガも負けじと抵抗。カルマを振り落とそつともがいた。

「オオ――ンッ――！」

「ぐつ……がツ――！」

ヒレに捕まり、振り落とされまいと耐える。鎌に高エネルギーを流し入れ、更に深く刃を食い込ませる。バランスはいつ崩れてもおかしくない。

「“破壊光線”ツ――！」

鎌の刃から光線を放ち、カルマは直ぐに力尽きる。ヘルオーガの動きも止まり、吐血した。
シス力を引きずり、ミズキは素早く避難。真っ正面からの血の雨を避ける。

雨が止み、カルマの安否はいかに……。

「カルマさん！！」

「……ああ、大丈夫。生きてるよ。」

鎌を引き抜き、再び大ジャンプ。ミズキの目の前に着地した。

「まだ生きてる！ 気は抜けないぜ？ シスカは？！」

「大丈夫……。今、立つから。」

ゆっくり起き上がり、レイピアを構える。再度戦闘態勢に入った三人を睨み、ヘルオーガは怒りの咆哮を浴びせた。ハイパー・ボイス並の空気振動が真っ正面から襲いくる。思わず腕を顔の前でクロスさせ、防御態勢に切り替えてしまう。

水中へ潜り、ヘルオーガはどう戦うか戦略を練り直し始めた。それを知らない三人は、背中を合わせて回りを見渡している。

刹那。ヘルオーガは水中から飛び出して、上空から足場へ突っ込

んで来た。間一髪で避けたデッドバスター達だが、水中へ投げ出され、毒にやられ意識を失つてしまふ。足場は崩れ、立つ場所が無くなつた。

大胆な攻撃をしたヘルオーガだが、頭を引き抜き、腹を引きずつて水中へ。デッドバスター達を喰らおうと、大口を開けて迫り始める。

最早、絶対絶命の危機！

めろ……

ヘルオーガの動きが止まつた。奴の脳裏には、美しいポケモンの姿がある。

それ以上、地上の民を傷つけるなッ！！

ヘルオーガの体内。どす黒く染まっている海の宝玉が、突如青く輝き始める。するとどうだろ？……。テッドバスター達の周りの水が浄化されたではないか。これを見たヘルオーガは、豆鉄砲をくらつた鳩のように驚いている。

氣を失っていたミズキ、一人目覚めて辺りを見渡す。そして、お守りの青いウロコを取り出して見つめた。ウロコは、青く美しい光を放っていた。

……カイオーガ様、まだ生きているのですね！

目をうるうるさせ、ウロコを抱く。
しばらくして、ヘルオーガを強く睨み付け叫んだ。

「ヘルオーガ！！よくお聞きなさいッ！！貴方は、この世界の海を統べる者……大海の霸者にふさわしくないわッ！！」

翼を開き、水の力を限界まで高める。ミズキの体が青白く輝き、ヘルオーガは鎌のヒレで光を遮る。

「デッドスターだからこそ成せる技……見せてあげるわッ！！奥義、“アクアブレード”ツ！！」

千を超える水の刃が放たれ、ヘルオーガの鎌を一つ粉碎。そのまま全身を飲み込み、身動きが取れなくなる。浅い傷だが、ヘルオーガは切り刻まれ続け苦しみもがいた。

この“アクアブレード”は、“水の波動”と“かまいたち”を合わせた合体技……。こんな無茶苦茶が可能なのは、デッドスターだけだ。

「はあああああッ！！」

団扇のよう翼を扇ぎ、フルパワーの一撃。巨大な水の刃を放つことで、ヘルオーガの体に大きなダメージが。気絶したヘルオーガを確認して、眠る一人を翼で押し上げながら泳いだ。

崩れた足場の、僅かな空間。一人を寝かせて、ミズキは再び水の中へ。ヘルオーガから宝玉を取り返しに戻つたのだ。

「……あれ？ いないわ！ ！」

消えたヘルオーガ。ミズキは辺りを見渡す。ウロコの力は、まだ持続されている。

「？！」

殺氣を感じ、後ろを振り向いてみる。何も無い毒水から、忍び寄る黒い影……。ヘルオーガだ。

ミズキは直ぐに構える。

彼女に向かつて来たのは、ヘルオーガが放つた氷の矢。水の中を泳ぎ周り、矢を避けて回るミズキ。“水の波動”で反撃するも、当たつたかどうかわからない。当たつたとしても無傷だろう。ミズキ

は、ゆっくりとヘルオーガへ近づいて行つた。

シェリア地方上空

スワンの泉を探して、トルネロスが飛び回つてゐる。静寂の一時……。悪魔の危険だなんてみじんも感じ無い上空から、赤い雷鳴が見えた。

トルネロス、あそこだッ！！

「承知！」

スワンの泉

さつきの雷で感電し、ミズキは水面に浮いてゐる。瀕死寸前の状態で、戦う気力はもう無い。岸へ上がりたくても、体が動いてくれ

なかつた。

「私……。死ぬのかな？ カイオーガ様を守れないまま……。仲間すら守れないで……死ぬのね。」

目を瞑り、闇に身を委ねる。彼女の目には、涙。家族と過ごしたコアルヒー時代が、走馬灯のように蘇つてくる。写真で見たカイオーラの姿は、どのポケモンよりも美しかった。

再び水柱が立つ。ヘルオーガが上空に現れ、ミズキを喰らおうと突っ込んでくる。

「ナニイイイイイイイイイ！」

「やせんかあ——ツ!—」

叫び声と共に、つむじ風がヘルオーガに向かつて行つた。つむじ風はヘルオーガを切り裂き、ミズキへの起動をすらす。

水面から顔を出し、ヘルオーガは放った主を睨む。丸い空を浮遊するは、風神と呼ばれし神の代行……トルネロス！

「ギリギリ間に合つたようだな……。ゆくぞ悪魔！代行の裁きを受けるがよい！」

地と平行になるよう両腕を伸ばし、手の平を天に向ける。風の渦を手の上に作り出し、ボールのように投げつける。風の渦は暴風となり、ヘルオーガを猛攻。

暴風で身動きが取れない中、必死に態勢を立て直し、倍量の矢を放つてトルネロスを攻撃。

フルスピードで矢の間を縫つて飛び回るトルネロス。スピードなら上手だと悟り、咆哮するヘルオーガを横目で見やる。

「手荒だが、これしか無いな。」

血迷つたのか、トルネロスはヘルオーガへ突つ込む。田指すは口中。何を考えているのだろうか。このままでは食べられてしまつ。

トルネロスが体内へ侵入したなどと気づかず、ヘルオーガはトルネロスを探している。

「グガツ！！」

激痛で動けなくなり、ヘルオーガは叫び声を上げた。

体内では、トルネロスが大暴れしている。全ての力を使い、風の渦を体内で膨張させていく。渦は鋭い刃。トルネロスが操る風まるで、龍の如く荒々しい。風の龍は内蔵を切り裂き、内側から頑丈な皮膚を破つた。

トルネロスの風で、ヘルオーガは破裂。肉片は、生々しく水面に浮いている。それを見つめるは、体内から解放されたトルネロス。黒く染まった宝玉を握っていた。

「ゼエ……。ハア……。これなら再生できまい。さて、デッドバスター……達を……。」

意識が遠退き、トルネロスは毒水の中へ落ちる。あれだけの力を使つたのだから、無理もない。

改めて周りを見ると、上級悪魔の強さ、知能がよくわかる。落石で退路を断ち、確実に獲物を捕らえようとすると、技の威力はまさに脅威。

こんなのが、世界に「うじやうじや蔓延はび」^はしているのだと思つと、おぞましいものだ。

「……ああーー！」

回収係のユングラーとケーシイ五人が到着。みんな、白い白衣を着ていた。赤いハチマキを付けたユングラーが指揮を取り、デッドバスター達を回収。

「先に、アンダーワールドの医療施設へ向かえ！」

「「はーーー！」

ケーシイ達が去り、他に誰かいなかと辺りを見渡してみる。

「ん？ あのの方は！！」

トルネロスを発見し、ユンゲラーは水面へ。脇に腕を通して、力一杯引き上げる。一度岸へ上げ、安否を確かめた。

「トルネロス様、トルネロス様！！」

「う……うう……。」

「よかつた。意識がある。……ん？ この黒い玉は、宝玉？ 一応持つて帰ろう。」

アンダー研究所。

運よく逃れて来た神々の代行が集う唯一の場所。聖なる地の代役場、アンダー研究所。只今、教会設立のため工事中。

「……。」

「レジロック、お疲れ様です。」

「?……//ラ姫。」

工事現場の鉄骨に腰掛けているのは、レジロック。ぼーっとしていた彼の元へ、ボンドリンク片手にリリカがやって来た。

「はい。ももボングリのドリンクです。疲れた時は甘いものが一番よ。」

「アリカトウゴザイマス。……マタ、神帝様ノコトヲ考エティタ。アノ御方ノカデハ……無理ダッタ。悪魔ハ強ク、危険ダ。」

「そうですね。けれど、今は前に進みましょ。ゼクロム様がいつも言っていたでしょ?『前を見よ、例え遠き道のりであろうと進むのだ。必ず、理想の光は其処にある。』って。信じましょ!彼等の無事を!ほら、せっかく作ったのですから一口くらい飲んで下さいよ。」

「ア、アア。」

レジロックから離れ、ミラはとあるポケモンの元へ。研究所の出入口へ向かい、外の踊り場へ。広間のような広さのここには、巨大なクリスタルが存在する。ひし形のそれは、宙に浮いて回っていた。クリスタルを見つめている、水の如く清らかなポケモン。スイクン。銀の兜と膝当てを付けていた。

「ミズキ。」

「?...ミラ様。すみません。仕事をせずに...。」

「いいえ。いいのです。同士の心配ですか?」

ミラに聞かれ、スイクンは深い悲しみに暮れた。クリスタルへ目を向け、頷く。

「ヒンテイ、ライコウ、そして...。彼等三剣士が心配で...。彼等

だけじゃない。外界に残された代行様達だつて。僕等は、貴方達を守る騎士団。今何処にいるのか……無事なのか……。」

「スイクン。」

彼の前に来て、ミラは明るく振る舞う。

「貴方は最後まで、私を守つてくれましたね。彼等はきっと、外界に残された民を守つていますよ。柔なポケモンではありませんからね。ゼクロム様の教えを信じて、待ちましょう。ね？」

暖かな天使の微笑みは、スイクンの心に温もりを与えた。目に涙を浮かべて、はい。と、一言。精一杯の笑顔を見せた。

「ミラ姫ー！」

「レジアイス……？ 何事ですか？！」

「上級悪魔ノ研究結果ガ『マシタツ！』デッドバスター基地へ情報

「上上ゲー行クノデ、外出許可ヲ下サイ！！」

「わかりました。お行きなさい、レジアイス！」

デッドバスター基地

医療施設

黒王は、保護されたトルネロスと会話をしている。外界での出来事を全て、包み隠さず教えてくれた。

「そうですか。では今日、日が暮れる前に集落へ行きます。……風神様、もう一つよろしいでしょうか。」

「うむ。」

「私達『デッドバスター』は、以前にも上級悪魔と接触した経験がござります。外界にいた貴方様なら、マザーコアから警告か何か聞いたのではありませんか？」

「上級……。はつーそうじやつたッ！…ワシは……。」

トルネロスの回想

ある嵐の夜。ワシはいつものように、外界に残されてしまった民を守つていた……。そんな中、ワシはマザーコアからのテレパシーを聞いたのじゃ。初めて聞くテレパシーだった。清らかな、透き通つた女性の声……。

「ポケモンの神の子……。私は悪魔の神、マザーコア。」

「マザーマジック……。」

「お前達の足掻きは終りだ。我々は明日、この星を完全に制圧する。まずは……神の木を枯らすとしようか。」

「聖なる木を……？！それだけはさせんッ！－このトルネロス、命に変えてでも、アルセウス様の木を守つてみせるッ－－！」

「フフフ……。そう言つと思っていた。だが所詮、レベルの上限が一〇〇までのお前達は負けるに等しい。……いいことを教えて

やうひ。まずはスワンの泉を狙つ。止められるものなら止めてみるがいい。フハハハハハッ！！」

現在

「という訳じや。ワシは、民を集落へ届けたあと……。ディアルガ様の声を聞き、急いで泉へ向かつた。が、負傷してしまい……気がついたらここに。」

「やはり……。マザーは本格的に動いているであるな。」

「オズ？！」

どこからともなく、陛下モードのオズが現れた。黒王はオズに向かつてズンズン進み、溝内に力一杯パンチした。悪魔の腕を使ったから、オズが負ったダメージは生半可なものでは無い。

「さほりか貴様！さつさと訓練所へ行けッ！！」

ドカッ！！

「ゲフッ！……ぼ……暴力反対……である。イタタタタ……。ガイア殿、アンダー研究所から研究結果がきたのだ。」

「何？」

「お主このあと任務だらう？聞いておいてくれぬか？風神様も……。

」

「つむ。」

「……単刀直入に言ひ。上級悪魔はな……。」

「……何だつて？！」

「では、余は重傷のデッドバスター達を見てから帰るのだ。」

陽気に立ち去るオズ。ガイアは頭を抱えて、なんておぞましいんだと固く目を瞑る。

「さて、ワシもおちおち寝つてはいられない。少し無理をしてでも、民と神帝様の為に作業をしようつー黒王とやら、研究所まで案内してくれんか?」

「はい。風神様。」

s a i d オズ

オズは、上下の腕を組んで考え事をして歩く。浮遊移動だが。訓練所に来たレジアイスは、血相を変えてオズを呼び出した。危うく陛下と言われそうになつたが、なんとかバレずにすんだ。

上級悪魔はポケモンを喰う。だから、ポケモンが持つタイプエネルギーが体内に蓄積している。この仮説は本当だつた……。

悪魔の限界レベルは一〇〇。フルレベルが上級悪魔と化す……と。レベル一〇〇までの我々には、無理に等しい相手であるな。更には力を押さえ込み、レベルを下げる事が可能だとは……。驚いたのだ。

だがこれでハツキリした！！蓄積したタイプエネルギーを打ち消す、弱点を突きさえすれば、例えレベル一〇〇でも勝てるツ！！

けどそれには、セルフィオにエネルギーを識別する装置を作つてもらう必要があるな。

厳重ロックされている扉へ向かい、オズは下腕を一つ引っ込める。ぬつと再び伸ばした手には、IDカード。

タッチパネルにカードをかざし、扉を開ける。横にスライドした扉は、オズが入室して直ぐに閉じた。中では、点滴を付けて眠る三人が……。更には包帯だらけで、壮絶なバトルを物語つていた。

「ん？四人組みの片割れ三人……と……。」

「エンペルトのイブキ。氷の国の王だ。君が……“オズ君”だね？」

「あ、はい。」

なんと、エンペルトのイブキがいた。三人をシスカに会わせるため、IDカードをわざわざ発行してきたりしい。ちゃんと民扱いをしてくれて、内心のオズは一安心。遠くで、眠る三人を見据えた。

よく、頑張ってくれたである。誉めてつかわすぞ……。お前達。

To be Next

？・緊急!!シショーン・王玉を奪還せよ---（後書き）

【次回予告】

ディアルガ

「トルネロス来襲で、デッドバスター達は助かつた。

上級悪魔の力は、我々と同等か……それ以上。レベル一〇〇は、我等神の本気に等しい力だ。気を抜くでないぞ？

次回も祈ろつ。

愛しい子等に、希望の光を。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5940y/>

ポケモンTHEクロニクル

2012年1月5日23時45分発行